

くぐり戸から入った瞬間、我々は言葉を失うだろう。まるで台風が総てのものをなぎ倒したような殺伐たる風景がある。3m前後の青石がぎっしりと積み込まれているこの庭園はどんな天才作家が作ったのか、どのような気持ちで、どのように神がかったのか、またこのようなエネルギーな時代が日本にあったのか、頭の中は次から次へと疑問が湧きあがってくる。この庭園で感じることは、日本にも疾風怒濤の時代があった証でなないだろうか。

当寺は全国60余州の国分寺の一つとして天平時代に創建された。その後真言宗に転宗し、長曾我部の兵火(1582年)に遭ったが、この地の豪族三好氏が再建し、このとき庭園も築造された。しかし1741年に現本堂を再建した際、庭園の中心部分を壊してしまった。

当庭は最近の修復作業の中で江戸時代の遺物が発見され、後世手が加えられたことが解った。



洞窟の右奥から滝が流れ落ちている景（廬山の滝を象徴したとも言われるが、広島県の帝釈峡を彷彿させる）



池南部築山は三段に石が組まれている



圧倒される石組：五老峰を模したとも言われている



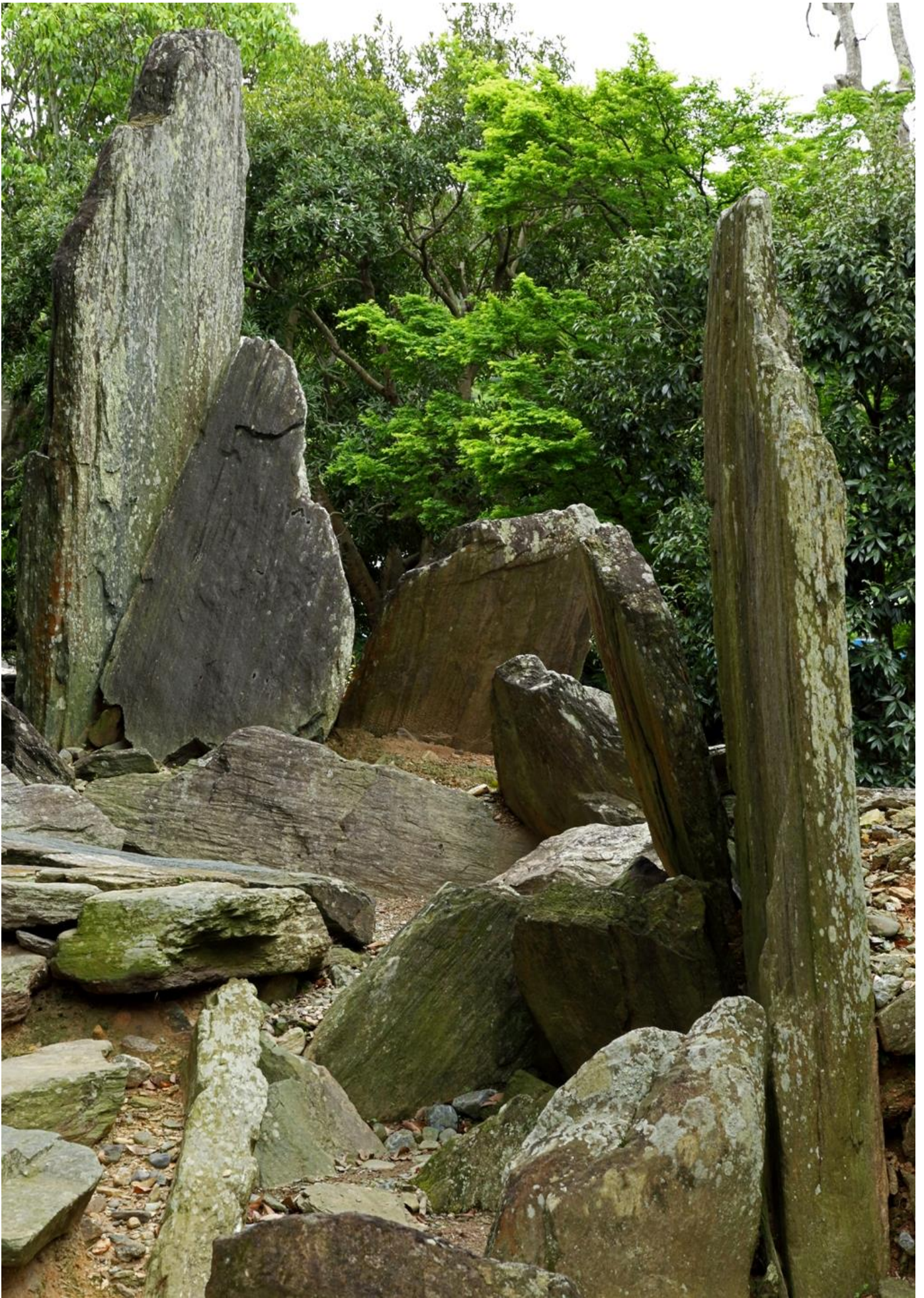
枯滝は大仙院のように象徴的造形であるが、全般的には抽象的配石を意識している



本堂側から見た五老峰または蓬莱連山石組:変幻自在な石組みに天才の閃きを感じる



阿波国分寺須弥山石組



本堂裏の林立する石組

鱗片状の巨石を自由に舞い踊らせるような感性和技量がこの時代にあったのだ。なお、画面左側の造形(立石を背後から支えている石組み)はイサム・ノグチの作ったパリのユネスコ本部に蘇った。

